南北

太平記圖會

五

讃良親王

正成

圓心

尊氏

義貞

へ伊13
1989
6

門へ 13
1989

本

南北太平記圖會卷之五

初篇

目録

宣房卿屈理仕二君
山門消常燈露不思議
高時興田樂誑妖魔
高時專弄闘犬會
治部廉皇妃蒙夢想
尊雲親王紆擅遁危急
尊雲親王艱苦南紀
定遍出法瞞八荘司
義光獨行奪却錦旗

野長瀬兄弟救護良親王

南北太平記圖會卷之五

宣房屈理仕二君　山門常燈消露不思議

元弘二年三月廿三日持明院量仁親王。御年十九才にて御位ゝ即ちまし。御母ハ竹内左大臣公衡公の御女にて。後ゝ廣義門院と申る御方なり。同年四月改元有て正慶と号し。又十月廿八日ゝ河原の御禊在て、十一月十三日に大嘗會被遂行。時の關白ハ左大臣冬教公別當ハ則中納言資名卿なり。いつしか當今奉公の人〳〵ハ。皆一時ゝ望を達して門前市を成。堂上花を飾る。中ゝも梶井二品法親王尊胤。天台座主ゝ成ちゐて。大塔梨本の両門跡を并せて御管領ありしかば。御門徒の大衆群集して御拜堂の儀式厳重なり。加之御室二品法親王法守。仁和寺の御門主ゝ御移り在て。東寺一流の法水を湛

て北極萬歳の聖運を祈ㇾ。是皆後伏見院の御子。當今の御
連子なれど繁榮時を得ㇾ人々なれど覺々。爰ふ万里小路大納言宣
房卿ハ元来前朝舊勞の寵臣にておはしし上。子息藤房季房二
人笠置落城の後。遠く被ㇾ所流刑ㇾ。其災父卿も懸ㇾ何ㇾ罪
ハも可ㇾ行所。賢才の聞へ有とて。鎌倉より別儀を以て其罪を宥ㇾ。當
今ハ可ㇾ被召仕之由と奏し申されㇾ。依ㇾ之急ぎ中納言資名卿を勅
使として此旨を被仰下ㇾ。宣房卿勅使ハ對し謹で申されㇾ。臣
雖不肖之身以多年奉公之勞。蒙君恩寵官禄共ハ進で。刺汚政
道補佐之名。事君之禮。値有其罪。犯嚴顔。以道諫諍。三諫不納と
ㇾハ奉身以退。有匡正之忠。非阿順之徒。是良臣之節ㇾ。若見
可諫而不諫。謂之尸位。見可退而不退。謂之懐寵。尸位懐寵國之奸
人ㇾといへ。君今不當之行ひおはしまして。爲武臣被奪給へ。是臣

預め不知所ㇾ。ハ依て雖不献諫言世人豈愚臣ハ無其罪。許哉就
中長子二人被處遠流之罪。我已ハ七旬の齡ハ傾ひていへど。後榮爲
ㇾ期ㇾ。前非何ぞ又恥ざらんや。二君の朝ハ仕て尊を衰老の
後ハ抱んㇾ。伯夷が行を學びて飢を首陽の下ハ忍んㇾハ不如
ㇾと。淚を流して宣ひくれば資明卿も感淚を押へ兼て暫ハ言も不宣
良有て宣ひくるハ忠臣不必擇主。見仕而可治而已也といへㇾ。去ハ百里奚
ハ二たび秦穆公ハ仕へて。永今致霸業。管夷吾ハ翻て齊桓公を佐ハ
て九たび今朝諸侯主無以道射鉤之罪。世皆不奈鬻皮之恥といへ
就中武家如此許容の上ハ。賢息二人の流罪も。爭ハ赦免の御沙汰
なかんや。夫人ハ天地の體を備へ。天地の用ハ達するを以て人ㇾ。伯夷
叔齊飢て何の益かあるや。許由巣父遁れて何の德かある哉。抑隱身
永斷末葉之一跡。典。仕朝遠耀前祖之無窮。是非得失何爰有

乎。典鳥獸同羣孔子の所不執也と。資明卿事を多く理を盡して被責
くれハ。宣房卿首を低て顔色縅ふ屈伏しの人様こそ。以罪棄生則違
古賢多改之勸忍垢苟全則犯持人胡顔之綴と魏の曹子建が献
詩の表ふ書さしも。理とこそ存へしと。遂ふ參仕の勅答をぞ被申
くる其頃都鄙の間ふ様くの不思議共多かりくれで皆人危ミ呼て。
又如何なる珍事ぅ起アねべきと。其沙汰區くちうくるが就中山門
の根本中堂の新常燈ハ。先帝山門へ臨幸成し時。古へ桓武天皇
自挑けさせのひし常燈ふ準へ御手づかく百二十筋の燈心を束。銀の
御鉸ぅ油を加へて。自撮立させのひし燈明也。是偏ふ皇統無窮
を耀さん爲の御願。兼てハ六趣群類の暝闇を照す慧光ふ準へて
始置のひし常燈なれど。未来永却ふ至ても消べきに非ざる所ふ
或日中堂の内陣へ其色黑き山鳩一番飛来て。新常燈の油鉸の

の中へ落入羽を打てうるをさくる間。燈明忽ちふ消ふうり。此鳩堂中の
闇さふ行方を失ひ迷ふて。佛壇の上ふ翅を低て居ぅうる霧ふ承塵
の方ぅ其色朱を指ぅるが如き。鼬一つ走ぅ出て。此鳩を二つぅ〳〵に
殺ぅてぞ失ふる。此不思議何なる前兆ぅ事をぅるざるぅが。後ふ
或者の思ひ合して判じるハ。皇統無窮の燈明の消るハ。先帝遠く
隱岐州へ遷幸在て暫く皇輝を失ひのふふ應ぜ。幾程なく北條
相摸入道高時の亡びしハ。正慶二癸酉年なり。癸ハ北方ふ屬し酉ハ
西方ふ位ぅ。是吾國西北の伯耆ぅ起て都へ還幸成のふ年に應
ぜり。又云癸ハ北方の水其色黑し。故ふ正慶二癸酉ハ則ち二黑鳩
なり。後又足利尊氏の爲ふ芳埜へ遷らせのふハ。延元元丙子年へ
丙ハ南方ふ屬し子ハ北方ふ位ぅ。是北方の平安城ぅり。南方の
吉野へ遷幸の年ふ應ずるなり。又云丙ハ南方の火其色赤し

高時妖魔ゝ誑
くされて田樂法
師ちりと思ひ
て同じく舞
狂ふ図

鮎さま鼠の類属なる故ふ文字鼠ふ縁。則ち延元一丙子ハ是一朱鮎
なり。此度の奇怪。不思議の中の不思議なりとて。其頃専ら沙汰し
なるとぞ聞へし

高時興田楽狂妖魔　高時専弄闘大會

又其頃洛中ふ田楽を弄ぶ事。昌みて貴賤挙て是ふ著き。相摸
入道此事を聞及び。急ぎ新座本座の田楽を呼下し。日夜朝暮に是
を弄び入興の餘りふ。宗徒の諸侯ふ田楽法師を一人づ預けて賢束
を飾らせなる間。是ハ誰某殿の田楽なんど持ちやして
金銀珠玉を逞ましく。綾羅錦繡を妝て宴ふ臨て一曲を奏されバ相摸
入道を始めて一族の大名。我劣らじと直垂大口を解て抛出す。是を集
めて積ふ。恰も山の如し其弊へ幾千萬とも数を不知。さる或夜一南の
催しに有なるふ。相摸入道数盃を傾け。酣ふ和して立て舞事良久し。
是若輩の興を勧むる舞もあるべし。又狂者の言を巧ふする戯もあ
るべし。四十有餘の古入道ら酔狂して舞事なれバ。風情有べしとも
覚さるなる裏ふ何地より来るとも知ず。本座新座の田楽共十
餘人。忽然として坐席ふ出。入道と共ふ舞歌ひなる。其興甚だ尋常
ふ越たり。暫く有て拍子を替て欣ふ声を聞て。天王寺のヤヨウレ
ボシを見むやとぞ囃子なる。或近待の女房此声を聞て餘の面
白さふ堪兼て。障子の際より是を見よ。こと如何ふ新座本座の田
楽法師と見へつるハ。異類異形の媚者にて其形山野の如く成もつれ
て。鳧鵠の觜の如く勾て。身ふ翅つる者なり。女房大ふ驚き急き人
を走らして。城の入道にぞ告なる。入道取者も不取敢太刀追執て
殿中へ蒐入中門を荒るに歩なる翌を聞て。妖怪ハ掻消様ふ失て
相摸入道ハ前後も知ず酔伏なり。燈を挑さして遊宴の坐席を見

に何様天狗などの集まるなと覺て踏汚しなる畳の上に禽獸の如き足跡つけて城入道暫く霊空を睨で立られども敢て眼に遮る者なし良久して相摸入道驚き覺て起られくれども悶然として更に知所なし。後日に南家の儒者刑部少輔仲範此事を傳へ聞て曰天下將乱時妖霊星下て災を成といへり。今怪物の妖霊星と颯いるハ全く此凶星を云歟亦天王寺ハ聖徳太子守屋を亡して後鎮護國家怨敵退散の為に四天王を安置して草創し霊場なり。是を以て察するに不遠して此寺の邊より天下之動乱起て國家敗亡の兆なるべし。哀れ國主德を治め武家仁を施して消妖謀こそなけれと申されくるが果して此年楠正成天王寺に出張して軍を始しなり。遂に思知らず世と成にけり。彼仲範實に未然の凶を鑒るべき性智の程こそ恐しけれ。相摸入道かゝる妖怪も不驚増て驕奢に超過し奇物を愛する事止ときなし。或時庭前に犬ども集まて噛合くるを見て此禅門最面白き事に思ひて是を愛する事骨髄に入なり。則諸國へ相觸て或ハ正税官物に募つて犬を尋ぬ。或ハ権門高家に仰て是を求くる間。諸國の守護國司所々一族の大名十匹七匹づゝ飼立て鶴倉へ引進らるる程に。是を畜ふに魚鳥を以てし。是を維ふに金銀を鏤て其弊を不知。犬を輿に乗て路次を過る日ハ。道を急ぐ行人も馬より下て是に跪つゝ。費を勸む里民も夫に被執て是を舁に至る。如斯愛翫するが故に錦繡を身に纏ふ。肉に飽る奇犬鶴倉中に充満て四五千匹に及べり。月に十二度犬合の日を被定れば一族大名御内外様の人々或ハ堂上に座を列ね。或ハ庭前に膝を屈して見物す。于時両陣の犬共を百五六十匹づゝ放合セ入替々闘しむる。上に成下に成入違ひ追巡りて噉合声。天を響し地を動す。心ある人ハ是を

見てうゝ面白き有様なり。寇も戦場に雌雄を決するに不異と笑ひ楽
ミ。又心ある人ハ是を聞てもあるに薄情き事哉偏に郊野に尸を争ふ
に似たりと泣悲めり。見聞の准ふる霧。耳目雖異其前表闘諍死亡
の間を不出事こそ浅猿なれ。倩惟ハ時已に澆季に及びて武家天
下の権を執事。源平両家の間に落て。大政大臣清盛入道より已下百
七十年。然れども天道ハ必盈を虧。故に一代にして亡ぶ或ハ一世を待
ずして失ぬ。今北條の一家天下に権を執事既に九代連綿として相
續す精く此事を尋るに其故あり。昔鶴倉草創の已前北條四郎
時政榎島の辨財天に参籠して。子孫の繁昌を祈ぶるに。三七日
に當る夜。赤き袴に柳裏の衣着たる女房の端厳美麗なるが。
忽然として時政が前に来つて告て曰。汝が前生ハ時政とのゝ箱根法師
也。六十六部の法華経を書寫して六十六箇國の霊場に奉納せ
善根に依て。再び此土に生る事を得たり。去ハ汝が子孫永く此地に
権を執て榮花に可誇。但し其挙動違所あらバ七代を不可過。吾
所言不審なるを國々に納し霊の経典を見よと云捨て立消給へ其
姿を見れバ。さしも厳しかりける女房の。忽に伏長二十丈計の大蛇と成
て海中に入ぬ。其跡を見るに大なる鱗を三ツ落せり。時政所願
成就せりと喜びて。則ち彼鱗を取て旗の紋に押たり。今北條
家三ツ鱗形の紋所是也。其後御示現に依て國々の霊地へ人を遣し。
奉納の法華経を見巡らしむるに。経筒の上に願主大法師時政と書
たるこそ不可思議也。されバ北條家の繁榮七代を過て尚一天下を掌
握すも。榎島辨財天の利生と。過去の善因を感ずるなるべし。然れ共
今高時禅門の行跡不正に依て。可亡時刻到来して。乱逆近き
に在べしとこそ覺へたれ

高時諸國
數千の
犬を
取

是を闘はして
楽む図

治承廟皇妃蒙夢想　尊雲親王經櫃逃危急

夫年光不停如奔箭下流水。哀樂互替似紅葉黄落樹。甫で此世の中の有様只夢ゝやいゝん幻ゝやいゝん。憂喜共に感ずる時は。袖に露を催す事。雖不始今。去年九月笠置の城破れて。先帝隠岐國へ遷されさせ給ひ〜後は。百司の舊臣かゝ〜こを抱ひて所々に蟄居。三千の宮女涙を流して思ひ〜に沈む。其中も殊更うれしく聞へ〜は民部卿三位殿の御局ばかり留まる。其由を尋ぬるに。先朝御寵愛不浅うへ。大塔宮の御母君にてましを給へば。一方ならぬ御もの思ひに沉ませひて。潮さゝ岸は近くれども。干潟の波路に漂ひて。御氣色うとく聞食れて空傾く事もなき御袖のかゝる間もなき。御氣色うとく聞食れて空傾く思萬里之曉月。さる御子大塔宮は嶮しき南山の雲を踏まけうひて。狂浮なる御有様うとく聞ゆれども。難託書於三春之暮雁。彼と云此と云さまざまの方なき歎きに青絲の髪疎くなりて。何の間に老は来ぬらんと怪まれ。紅玉の雪おとろへて。くゝを限りの命共ぶらと詠ぜらる。御ゝ〜の遣方なくて。年来の御祈の師として。御誦經御撫物など奉らるゝ。北野の社僧何某の坊へおこなはれて。一七日参籠の御志ばかりを仰られけれども此折節武家の聞へも無憚おはゝ〜。又日来の御恩も重く。今程の御有様も御痛〜く。流石に無情事も申がたく。拜殿の傍に僅なる一間を拵へて。尋常の青女房ば参籠〜る由にて置奉れ〜る。哀其古なつかしバ錦帳に妝ひを竜。紗窓に艶を閉て。左右の侍女數を盡し。當を輝して。假冊き奉るべきに。いとしう引替る御忍の物竜なれバ都近くれども。事問ふ人もあらず。唯一夜の松の嵐に御夢をも結びのぶ。主忘れぬ梅ば香に昔の春を思ひ出さるさまへで。昌泰の年の末に荒人神と成せひし。心染紫の御住居も。

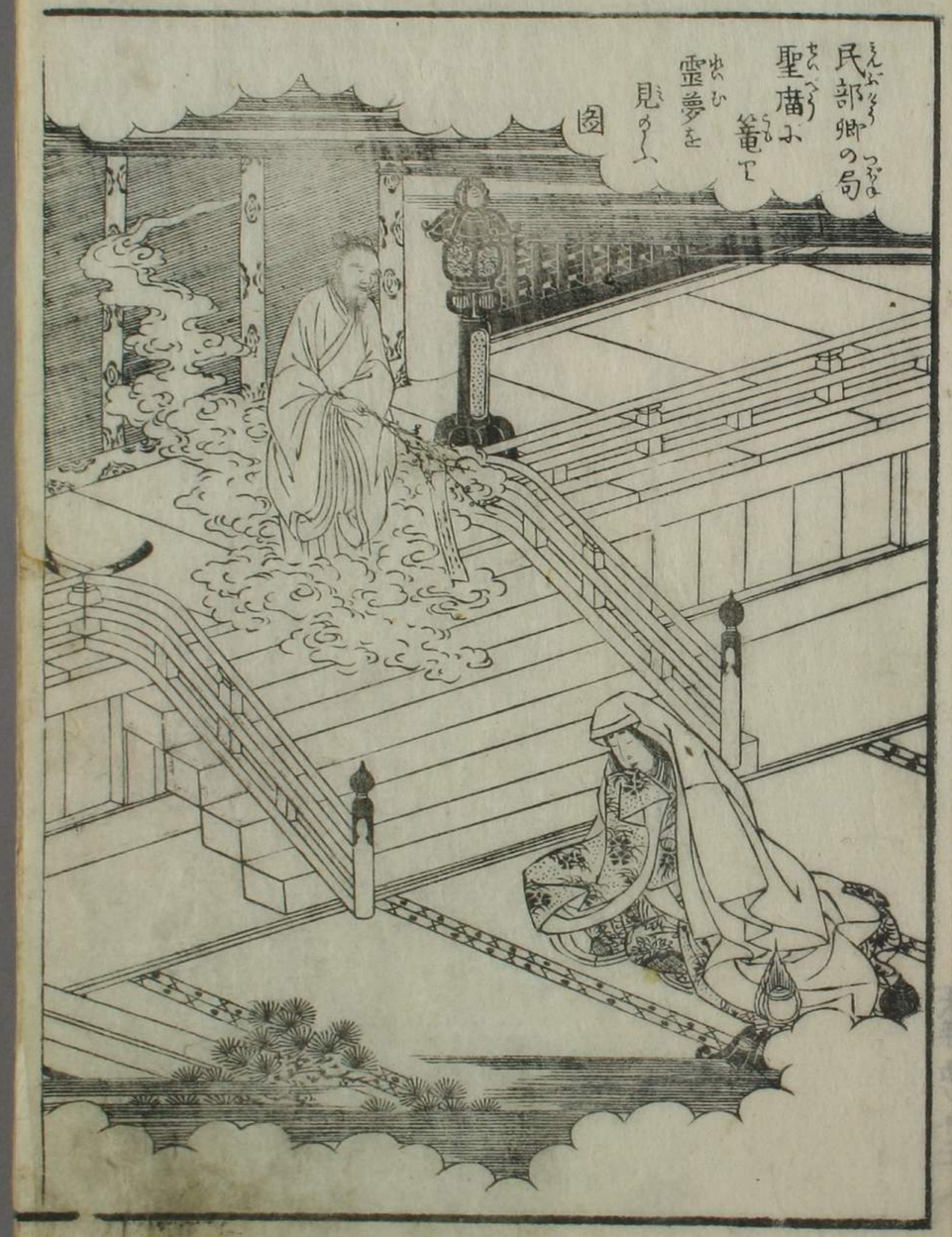
今ハ君の御身の上ヲ擬へ又ハ我身の歎ヲ思ひ當てのゝる哀の色の數〻ヲ御念誦を暫く被止て御涙の中ヲ

忘れずば神も哀と思ひしれ心つくしのいゝへの旅

と詠じ少し御目睡有る。其間の御夢ヲ衣冠正しく来る老翁の年八十有餘なるが左の手ヲ梅花を一枝持右の手ヲ鳩杖をつき。御局の外のひさゝの枕の邊ヲ立給へり。御夢心地ヲ思召るハ。篠の小笹の一節も可尋問人も覺さる都の外の逢生ヲ怪や。誰人の道ヲ踏迷へる休ひぞやと御尋有れば。老翁世ヲ哀れなる氣色して云出る詞もたゝて持る梅花を御前ヲ指置て立さりのひ給ふ。不思議なりと思召て梅花をとり上て見のへバ短冊ヲ一首の歌ハ

巡て来て遂ヲすむべき月影のたゞ〻陰なるを何嘆くらん

御夢覺て熟歌の心を案じ給ふ。君遂ヲ都へ還幸成て再び雲の上ヲ住セ可給御告の瑞夢なりと憑〻思召て涙と共ヲ社頭ヲ額さて立返ひ給ふ抑彼聖廟と申奉るハ。天満大自在天神の垂迹ヲ本地ハ大慈大悲十一面観世音ヲ渡らせのへバ一度歩ヲを運ぶ輩。二世の悉地を成就し。僅ヲ御名を唱る者。一切の所願を満足し。況乎千行萬行の紅涙を濃盡して七日七夜の丹誠を致させのひぬれバ霊誠暗ヲ通じて忽ちに感應ハ。世既ヲ澆季ヲ雖及信心誠ハる時ハ。霊鑑ます〻新なり。此時大塔宮二品親王ハ笠置の城の安否を被聞食ヲ。暫く南都の般若寺ヲ忍びて御座ハる。笠置已ヲ落城して主上被囚さゝ給ひぬと聞へしかば。虎の尾を履恐れ御身の上ヲ迫て。天地雖廣御身を可被藏所なく。日月雖明長夜ヲ迷へる心地して。鬼やらん角やと御胸を惱しのふ霧ヲ。一乗院の侯人按察使法眼好専如何して聞出しけん五百余騎を率して未明ヲ般若



寺へぞ寄うゝる。折節宮ゟ付従ひ奉る輩も。人目を憚りて近隣の坊ゟ忍び。又ハ京都の音信を伺んゝゟ罷出る跡にて。一人も有合さるべき一防防で落さゝ可給様もなく。兵不意ゟ寺内へ打入られて殺れて出のゝべき方もなし。さゝバ自害せんと思食て既ゟ推雷脱んとゝのひゝるゞ。事叶ハざゝん期ゟ臨んで。腹切ん事ハ最可安。若や隠て見ずやと思ひ返ゝて。佛殿の方を御覧ずるゟ寺僧の讀懸て置ゝる大般若経の唐櫃三ッ。二ッの櫃ハ未開蓋。一ッの櫃ハ御経を半端過取出ゝて蓋をもさゝうゝる。究竟の事ゝと思名て蓋の開ゝる櫃の中へ御身を縮て引ちゝゝ。其上ゟ御経を引被て。御心中ゟ隠形の呪を唱へてぞ座ゝゝる。若捜し出されぬゞ頸ゟ突立んと思名て。氷の如ゝる刀を御腹ゟ指當。兵の此ゟそと云んずる一言を待セ給ゝ。御胸の中の危さ推量も尚可浅。去程ゟ兵庫裏方夫を追取圍ゝ。佛殿へ

も乱入て壇上壇下天井までも無残所捜し尋ぬるが餘りに求めかねて大般若の櫃の目を附此物こそ怪しけれとて。蓋しる櫃二ツを開て御経を取出し底を翻して見れども不座蓋開る櫃ハ見あたらし。扨ハ疾く落失せ給ひつるめとて。兵ハ皆寺中を出去る。宮ハ不思議の御命を續ぎたまひ。夢か夢見心地して猶櫃の中に座る。若又立返つゝ委しく捜す事もや有んと。御思案有て頭て前に立返て前に蓋の開る櫃を見ざるしこそ。無覺束心憎くれとて御経皆打ゑして見るるが。中にも一人の兵呵ゝと打笑ひ櫃を開て大般若経を轉しられバ。大塔の尊雲ハ入せるハで。大唐の玄奘こそ坐しけれと戯れられバ。兵皆同音に大笑ひして門外へぞ出ける。是偏に摩利支天の冥應又十六善神の擁護に依所也と。信心肝に銘じ感涙袖を潤しぬ。角てハ此邊の御隠家も叶難くれバ。則ち般若寺を出させのひて熊野の方へぞ落させ給ふ。

御供の人々ハ光林房玄尊。武蔵房頼秉。赤松律師則祐。木寺相摸坊。岡本参河房。村上彦四郎。同藏人平貞三郎片岡八郎矢田彦七郎彼此已上十一人也。宮を始奉て御供の輩。皆柿の衣に笈を掛。頭巾眉半に責。其中に年長ぜる者を先達に作て立田舎山伏の熊野詣する体にぞ見せける。此宮元々龍樓鳳閣の内に長と成て給ひて。華軒香車の外を出させ給ふ御事なれバ御歩行の長途ハ定めて叶せ給ハじと。御伴の人々兼て心苦しく思ひくるふ案に相違して。さつ習ハせのひる御事なれども。怪氣なる単皮脚巾草鞋をどを被召て少しも草刈る御氣色もなく社々の奉弊宿々の御勤め懈らせ給ハざりしかバ。路次に行逢

道者も勤修を積み先達も。更に見たる事あるべくも

尊雲親王艱苦南紀　定遍出法瞞八庄司

斯て大塔宮ハ大和路を出て。紀伊路に懸ゝせの由良の湊を見渡し

のゝ。澳漕船の梶をゝ。浦の濱ゆゝ櫂重ともきゝぬ浪路に鳴千鳥

通ゝ淡路の嶋山も霞ワたる朝渚ハ薄紫や藤代の松にゝるべの磯

の沙和歌吹上を外に見て月に堂々る玉津島光も今ハ忍ばれて。

長汀曲浦の旅の空雨を含める孤村の樹夕を送る遠寺の鐘哀れ

を告る時〳〵もいれ。切目王子に着のゝぬ。其夜ハ業祠の露に御袖

を片敷のゝて通夜祈ゝ申させゝ給ハ。南無改命頂礼三所権現。

滿山護法十萬眷属八萬金剛童子。垂迹和光月明分陰同居闇

暗逆臣忽亡朝庭再耀事令得給傳へ承る。両所権現ハ是伊弉諾

伊弉冊両尊の應作也と。我君其苗裔とゝて。今朝日忽に浮雲

の為に被隠て冥闇〳〵豈不傷哉玄堂空〳〵きに似たり神若神〳〵

ら八君盍為君と五體を地に投一心誠を致して祈ゝ申ゝのゝ丹誠無

二の御勤をゝる感應ゝ空〳〵やと神慮も暗に被計る。終夜の

禮拝に御窮屈ゝ〳〵れゝ。御肱を曲て枕とゝのゝて轉御目睫在〳〵

る御夢に髪結ゝる童子一人来て熊野三山の間ハ尚も人の心不

和の故に。大儀成がゝし是ゝ十津川の方へ御渡ゝて時の至らんを

御待ゝへかし。両所権現ゝ〳〵案内者に被付進ゝてゝへゝ。御道指南

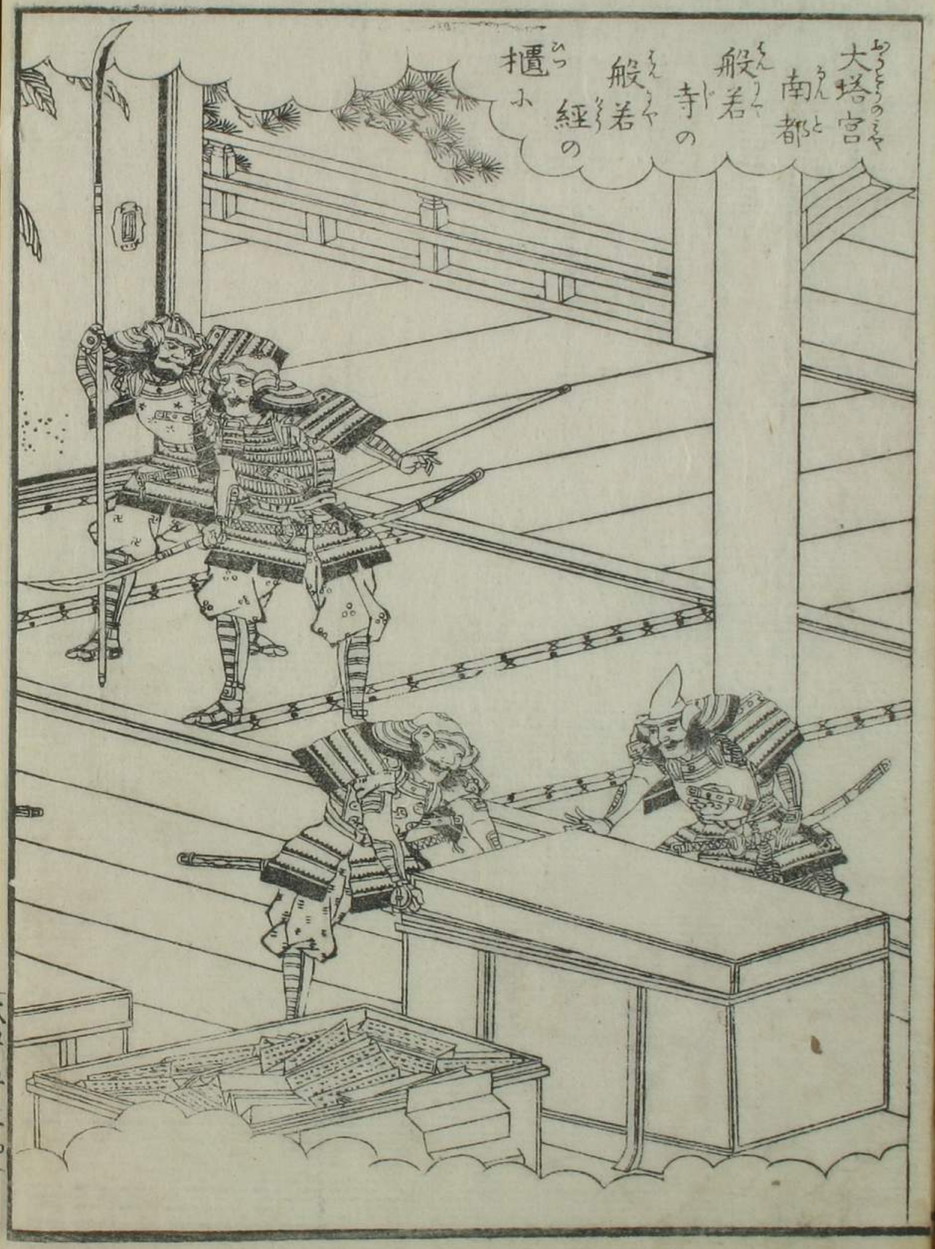
可仕ゝ也と申ゝと思へゝ。御夢ハ則ち覺ゝ〳〵。何に也是當社の

御霊告也と被思名ゝれゝば。心遇〳〵未明に御悦の奉幣を捧

げのゝ御供の人〳〵も此事を語〳〵ゝ是ゝ道を尋ゝて十津

河の方へ分入〳〵ゝ。其行程三十余里が間ハ山路ゝ〳〵て更に人

里もなゝ。向上ゝ万仞の青壁刀を削直下ゝ千丈の碧潭藍の如


大塔宮
南都
般若
寺の
般若
経の
櫃ふ

危難を免れ給ふ

雨ちとのへども空翠衣を濕し。日登るといへども緑樹重て其影陰し。或時ハ高根の雲ハ枕を欹て吾の袖ハ敷。或時ハ岩漏水ハ渇を忍び朽る橋ハ肝を冷す。數日ハ間斯ハ嶮難の徑を越させ給ひる事なれど。御身ハ流る汗ハ水の如し。御足ハ崖を履缺て指を損じ草鞋ハ血ハ染て甚ハ草刈させのゝ。御供の人々ハ其身鉄石ハ作るされど。皆飢疲てもろ〳〵敷も歩み得ざりゝれ共無是非御手を挽御腰を推進りて路の程十三日と申ハ十津河へぞ着ぬ。先宮をとゝ行る辻堂の内ハ奉置て御供の面々ハ在家ハ行て。是ハ熊野参詣の山伏共ていが。道ハ踏迷ひて此所へ来ていと哀れ一飯の法施ハ預る度由を申れど在家の者ども粟の飯椽の粥など取出して。其飢を相助く。宮ハも是を進ずてこの邊ハ二三日を過しるが。角ても始終如何なれど。光林房去尊

或家の是ぞ。さもある人なんと覺しき門ハ行て童部の用ゐ給ハ出るるハ向ひ家主の名を問れど。是ハ戸野兵衛殿と申人の汗ぶてゐと云。扨ハ聞及者なれ如何ハもして是を憑まゝ一思ひられど門の内へ入て事の様を伺ふ内ハ病者有と覺へて哀れ貴き山伏の御通ぎなれば。祈らせ進らせんと云声の聞へてゞり。すて究竟の車かちと思ひて声を高くハ揚て。是ハ三重の瀧ハ被打那智ハ千日籠て三十三所順礼の山伏ていが。路を踏違へて此里ハ出でい顔〳〵一夜の宿を借。一日の飢をも休め給へと云るれど。内〳〵怪氣なる下女一人走り出是こそ可然神佛の御計ひと覺へて。是の主の女房此頃物怪を病ていい。祈てこそのらんやと申ども。玄尊我等ハ夫山伏ていへば叶ひいはじ。ぢれハ見へる辻堂ハ足を休て座しハ先達こそ効驗第一の人ていい此様を

申さんに子細いなしと申されむ。下女走り入て事の由を告るに家主大に悦んで。さらば其先達御房を是へ請じ奉れ。御祈をうけ奉らんと申されむ。玄尊仕濟しうと悦び急ぎ立返て此由を申ければ。宮を始め奉りて御供の面々皆其館に入せ給ふ。宮病者の御ある所へ立寄せ給ひて。御加持ありて千手陀羅尼を三反高らかに被遊て御念珠を押揉給ひ給れば。病者自ら様々の事を口走り。誠に験縛に被掛さる。有様にて五體より汗を流し。足手を縮めて苦む。物怪忽ち立去と見へられぬれば病者則ち平癒す。家主夫婦不斜喜び驚る山中もいへば。別に畜へ迎も無之間。別に御引出物なんど叶ひ難し。せめて十餘日は枉て此所に御逗留ありて。御足を休めさせ給へべし。熊野詣の御山伏達の楚忽に忍びがたき御迎い事へ。安弥の例もいへば。是を御賀に給らんと打戯れ〳〵

各〳〵の笑ひを強て内へぞ入奉る。御供の面々外に其氣色を不顕とへども内には密に喜びて十餘日を過せ給ひ給ふ。或夜家主の兵衛客殿に来て薪火を催し四方山の物語をぞし給ふ。次に申さるは。旁くも定て聞及ぶ給ひしやん。大塔宮都を落させ給ひて熊野の方へ趣き給ひしと事〻沙汰仕ひしは誠にていやん。三山別當定遍僧都は無二の武家方にいへば。熊野の方へ御開らんは甚以て危き事に覺へい。哀れ此里に御入ありし分内こそ狹き所にいへども。四方皆嶮岨にして十里廿里の間は鳥も翔難し。其上人心實在て不偽。弓矢を取事世に超さう。去ば平家の嫡孫惟盛も我等が先祖を憑て此處に隠れ。遂に源氏の世ぞ〻も無恙いひ〻ると承るに。不問語を申されむ。宮誠に嬉氣なる御氣色にて。若其大塔宮なんどの此所へ来て御憑ありぐ被憑させ給さん

大塔宮
南紀
深山
艱難
之圖

ず哉と問ひ給へば。戸野兵衛面を改め申しも及びい。身不肖ふれへ共。某一人ぞふ斯事ぞと申いなく。鹿瀬蕪改湯浅阿瀬川小原芋瀬中津川ハ元〻吉野十八郷の者ども手剌に事有間敷覺へいと申〻。其時宮木寺相摸ふ此と御目合セ在れば。相摸兵衛が側ふ居寄て小声ふ云。今ハ何を云隠し申べきなれる先達の御房こそ大塔宮ふて渡らせ給へ也と申〻れ共戸野兵衛いさぎ不審晴ず。彼此の顔をつくづくと守るふ。片岡八郎矢田彦七暑さふ堪かね頭巾を脱で側ふ置〻るを見れば。實の山伏ふ成ぎれば月代の跡隠す。兵衛以の外ふ驚き扨ハ實の修験者ぞハ御座ざるけり。賢くぞ前の事を申出る物哉。此程の振舞さこそ尾籠ふ思ひ名ひつめと。畳〻下て首を地ふ着謹んで尊饗す。爰ふ兵衛が叔父ふ竹原八郎入道と云者ぞ。兵衛詳ふ子細を述て此者を

治ひ給ふ。竹原入道一儀ふも及ぶず同心し。是〻ぞ山山ふ關を居路を切塞ぎ。竹原又宮を我館へ請じ奉て。無二の氣色ふ見へけ〻ぞ。宮も御安堵ま〻して。此所ふ半年余り御座ぞる〻。大儀の計略法體ふてハ如何也。且ハ人の見聞を憚て思名〻御選俗の姿ふ成ぎ。御名も自ら護良と改めの。密ふ竹原入道が息女を夜の殿へ被名て御覺他ふ異ぞる〻。扨こそ家主の竹原入道も弥志を傾け。近邊の郷民をなびけしかば次第〻ふ吸伏し奉て今ハ中〻武家の政道を編するばかりふ成ふる。去む熊野別當定遍ハ兼て武家ふ心を通じ。若大塔宮此所へ御入ぎ。捕奉て六波羅へ可渡と。其用意專らにして相待る〻霧ふ。宮ハ切目王子〻〻路を踏替て十津川へ入せ給へ。近郷の者ども追〻仮伏し奉るし聞へ〻れば。定遍案ふ相違〻て心

驚き。若此事實ならば八庄司の者ども。宮を持奉らば。縱ひ十萬騎の勢を以て攻るとも。容易不可叶。何奉宮を他所へ偽引出し奉て可搦捕と工夫し。八庄司の路筋街道々々に高札を立て。大塔宮を奉討奉ん者ハ。非職凡下を不云。勢州車間庄を恩賞ハ可被充行旨鎌倉の御教書實正也。其上定遍別ハ六萬貫を可與也。御内伺候人又ハ御手人を討取奉ん者ハ。五百貫を可與。一旦宮ハ當り奉るとも。志を改めて降人ハ出奉ん輩ハ三百貫を可與。右何とも其日中ハ必らず沙汰し可與者也と書し。奥ハ起請文の詞を載て嚴密の法をぞ出しける。夫移木信為堅約也。献斤賂為奪心ぞれ。八庄司の者ども此札を見て何ハ心を動さざらんや。頻ハ首を傾けて事を談ず。方々つけ寄き奉動をすゝめぞ。宮も角てハ此所ハいかゝも始終悪かりなん。早く吉野の方へも御敢有べきかと被仰出るを。竹原八良入道ぞ始め戸野兵衛も。何程の事やれべきと強て留め奉ぞれば。其心を破ん事も流石ハ叶ぬを。給まで止事ぞ。恐懼の中に月日を送らせ給ハ慶ハ。竹原が子息等ぞ。定遍が高札ハ欲心を忠義心ハ背ひて潛ハ宮を討奉らんと企ればぞ宮も此上ハとて急ぎ十津川を御啓在て。高野の方へ赴うせ給ひぬ。

義光獨行奪却錦旗　野長瀬兄弟護良親王

されば高野へ赴うせ給ハ路ハ小原芋瀬中津河の三箇所ある路難所ハ。て而も敵の中なれば容易通ぶべきぞとて。先芋瀬庄司が許へ入らせ給ハ。庄司宮を我館へ入進らせず。側なる辻堂ハ置奉ぞ。と物具を固め路を遮て。其上使者を以て申ハ。三山別當定遍

大塔宮
竹原八郎
入道が館
落着
絵ゝ
図

武命を含で。君を待奉る事久し。某迚も武邊ふ黨しいへば。君を此所ふ止め奉らんと欲す。然れども君今御躬を某ふ投げ給ふ上ハ支奉るふ不忍。されバ迚此道より無左右通し進ぜん事。後日の罪科陳謝するふ不可有據。恐多ハいへども。御伴の中名字さうゆべき人を一両輩賜へ。不然バ君の重章を賜り。後日ふ至て君を支へ奉るし證跡ふ可仕とて。此二の間何れも叶ハざるとの御意ふいなり。無是非一箇仕ゝんずるあてハと。餘義なくも申入さうろれバ。宮ハ右の二條何も難義也と思召て敢て御返事もなうろれふ。赤松則祐進出て申るハ危を見て命を致すハ大丈夫の願所ふ。鬼も角も彼が所存解て御所を通しに義ハ有まじくいへバ。某が首を以て御大事に代ぶべしとて既ふ佩刀ふ手を掛るを平賀三郎飛蒐て押止ふ座の意見卒ふふいへども。我ゝ御所の股肱と成て甘苦を嘗。艱難を共ふする者。何ぞ御大事ふ代ことを辞せんや。然れども今君飛龍の時を待て。危急の中ふ御座近臣の捨身豈歎きのハざらんや。就中旌旗ハ猶凋易ふて一臣ハ求がし。戦場ふ馬物具を捨。大刀を献ふ奪れに事尤ずの聡ふ。今彼が申條ふ任セ。安ふ就て御旗を下し賜へしと申けれバ宮實もと思召れて則日月と金銀とて打て着る錦の御旗を芋瀬の莊司ふ賜り。宮ハ何事を。此所を遠く行過させ給へ。此時村上彦四郎義光ハ事在て遥の路ふ下て。宮ふ追着進ぜんと心急ぎて此所へ来かゝ。芋瀬莊司ふ無端も行合ぬ。義光芋瀬が従卒の錦の御旗を持るを見て。大ふ怪ミ事の様を尋ふ。莊司則甬くの事を語。義光両眼を瞎と見開。大ふ呵て申ゝハ。是抑何事ぞや。忝くも四海の御主の皇子。朝敵御追罰の

村上義光錦の
御旗を奪返
芋瀬ゟ従卒を
拋打怪力を
顕す図

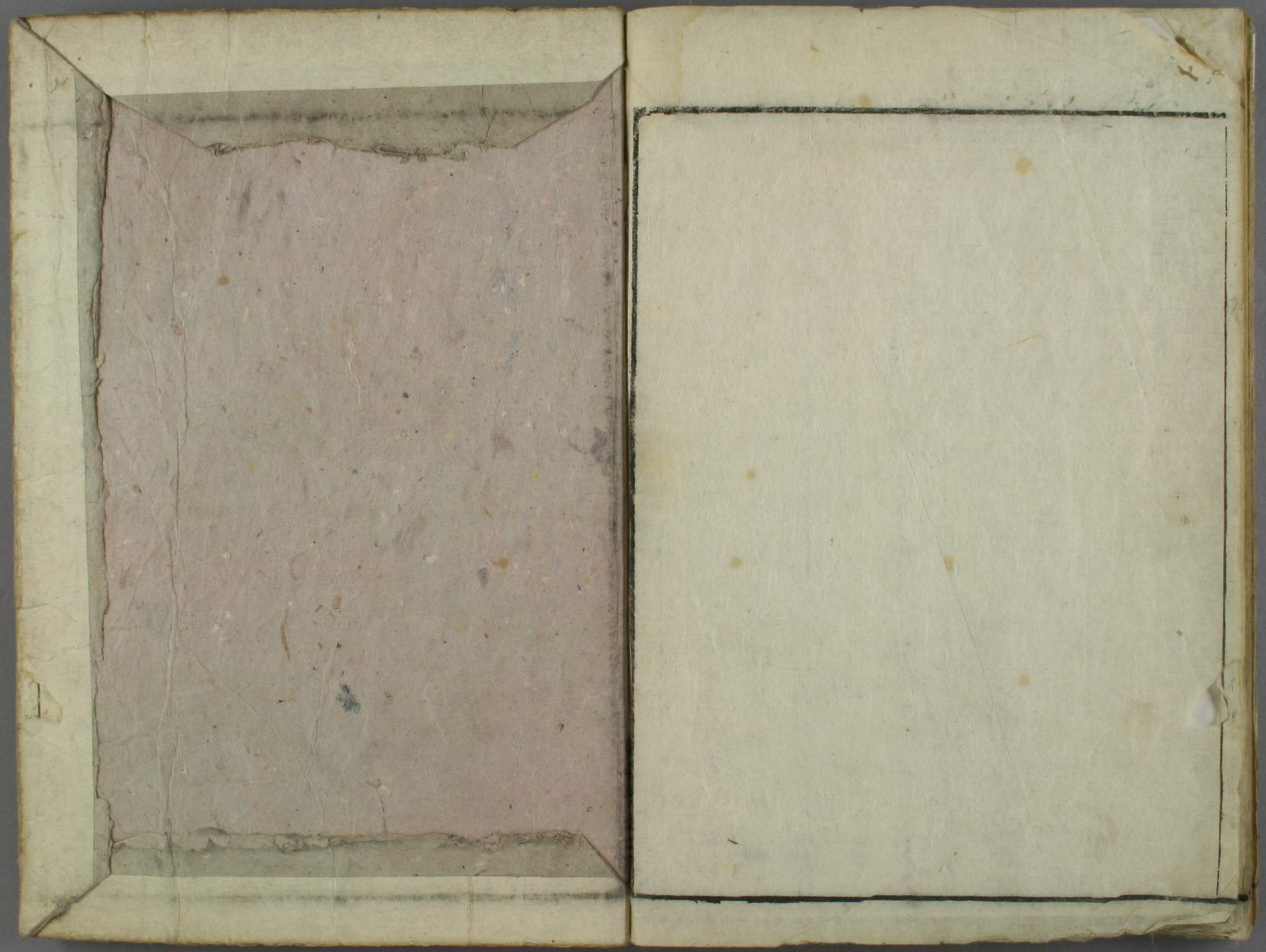
御首途を祝し奉る路次ふ祭合て。汝等程の大凡下の奴原が左様の事可仕やうやあるとて儘ふ。御旗を持て大漢を引寄。御旗を奪ひ取剥へ其大漢をかい飼で四五丈計ぞ抛て遣る芋瀬荘司ハ打られ果て一言も得いはず。付役ふ者ども。此怪力ふ驚き怖れ逸足出してぞ退さる。義光ハ御旗を自肩ふ曳かけて無程宮ふ追著奉り御前ふ出て事の様を申々れバ。宮ハ嬉氣ふ打笑ひ赤松が忠ハ孟施舎が義を守て。平賀が智ハ陳平が謀を得。村上勇ハ北宮黥が勢ひを凄く。天此三傑を以て我ふ幸福す。豈大功の不就を愁んやと被仰ケるこそ忝き。其夜ハ椎柴垣の隙うるる山の庵ふ。御枕を傾けるを給ひ。明れバ小原へと志して新負る山人ふ行逢道の程を御尋有るふ。心あるさ樵夫も流石。夫と推し進ずセてや在ん。薪を下し地ふ跪て。是ハ小原へ御通ハん道ふ。玉置荘司殿と申て無二の武家方の人のハが。此頃新関を居逆茂木を結て。御所を相待ハと覺ハ。此人を御語ひハ。そハ御通被遊ハ事容易かるまじくと存ハ。恐ハる申事ふハハへども。先御使を被立て彼人の所存をも被聞名ハへかしと申々れバ。宮熟々と被聞名古語ふ芻蕘詞尚不捨といへるハ是也。今樵夫が申慶賀ふと覺ずるこそ。頓て斤岡八郎矢田彦七二人を玉置荘司が許へ被遣て。速ふ木戸を開逆茂木を取拂ひ事をく可通旨を説諭さセるふに。荘司御使ふ出合て事の由をき。無返事して内へ入々るが。軈て有合若黨仲間を下知し物具を固め馬ふ鞍を置セ。事躁がし氣ふ見へ々れバ。矢田斤岡の二人事不叶と見ハ。早く立帰て此由を告奉らんと足早ふ引收ル。玉置が若黨五六十人取太刀引ふて道すがらとて追懸さり。矢田斤岡ハ並木の

小松を小楯とし。真先に進んだる武者の馬の諸膝を薙で刎落させ。返す太刀にて首打落し仰くる太刀を押直してぞ立さうなる。去程に玉置が軍兵追〻に蒐付〻けども。矢田片岡が手並に驚き。敢て一人も近付ず。只遠矢に射よと呼ばるる。散〻に射立るる。二人の勇士は焉を限りと切撰ひく〻れども。雨の降如く射すくめらるるぞ。片岡八郎二筋の矢を射付られ。今は斯ると思ひくれば。矢田に向ひ我既に手を負はれぬ。道れぐさし。爰に踏止つて打死すべし。和殿は早く立退て此危急を告奉れと勧めくれば。矢田も一図に陣死と思ひくるが。宮に此事告奉らざるも却て不忠と氣を取直し。今討死する朋輩を見捨て立退る心の中こそ安からさ。片岡扨は心安〻と村刈敵へ蒐入て今を限りと攻戦ふ。矢田は遥に行延て後の方を顧れば片岡既に討れぬと見て敵の中に首を太刀の

峰に貫きて差揚げる者ありけり。矢田は急ぎ馳寄て息をも不継。事の由を述るしるば。宮片岡が死を歎息〻ひ扨は道理なる道に行迫ぬ。運の窮まる處今更歎く詞なし。去ば迎此に留るべきにはあらず行もんずる處なれば道理なるや面〻にて。上下三十余人の者ども宮を守護して山路を進む。既に中津河の峠を越んと〻る處に向ふの山の峯に。玉置が勢と覺へて五六百人。混雪に鎧ふて楯を前に進射手を九右に分て鬨を噪とぞ揚る。宮是を御覽じて玉顔殊に儼ふて笑せ給へ。近臣に令して宣ひけるは。今は迎も道なべ〻ず。面〻力の續程は防ぐべし。我其間に心静に自害すべし。我死てのち面を皮剥眼を映て。敵に吾死を知しめべ〻ず。恐らくは武家は弥勝に乗朝庭を思ふ輩は大に望を失べし。縱死すとも威を天下に残すを以て良将とす。今は斯と覺まるぞ相構へて。きさすべれて敵の物笑に成べ〻ぞと

仰ぎ奉れば。御供の面々何條きさきをびれいべきとて。麓より責のぼる敵ふ太刀風揮へ〳〵下向へば。寄手ハ楯を嶮羽ふ付〳〵とふて かづき寡。ちら〳〵色を出して相近附。宮ふ従ひ奉る輩。僅ふ三十二人是皆一騎當千の兵とハいへども。數日嶮阻を経て身心疲れ〳〵上ふれば。此多勢ふ蒐合さん事。十分危ふく見へる處ふ忽北峯より赤旗三流。松の嵐に翻〳〵其勢二三千騎が程。三手に分れて山を下り。時を造りて玉置が勢ふ立向ふ。真前ふ進ぶる武者二人。大音揚て申々ハ紀伊國の住人野長瀬六郎同七郎兄弟。其勢三千余騎して大塔宮の御迎ひふ馳参る所ふ。恐多も此君ふ對ひ。弓を控楯を突ハ。玉置荘司殿と見〳〵ハ僻目ふ。唯今可滅武家の逆命ふ随ひ。即時ふ運を開うせ可給宮ふ敵對奉る。一天下の間。何處ふ身を置んと思ふ〳〵や。天罰我等が此一戦ふ。餘する偏する者共と下知して。短兵急ふ攻ふ

くらバ。玉置が軍卒大ゐ狼狽止途路ゐ成て四方ハ方へ逃散ぬ。宮ハ不思議ゐ危ふさを遁れのひ。則ち野長瀬兄弟を御前近く名れけゑ。六郎七郎甲を脱弓を脇狭て遥ゐ下つて畏り。宮野長瀬ゐ向つて宣ひゑ。ハ。十津河の為体山深ふして大儀の計畧難叶かるべき間。大和河内の方へ打出て軍卒を催さん為ゐ。急ぎ令進発之處ゐ。玉置庄司只今の挙動當手の輩。萬死の中ゐ一生をも得がたしと賞つるに。西人不憲の扶けゐ逢事。天運尚憑ふゐ似ゑ。抑此事何として存知ゑゑれバ。此場へ馳来て逆徒を追掛ゑるぞと御尋ゑゑれど。野長瀬六郎畏て申ゑハ昨日の晝程ゐ年十四五計の童名を老松と名乗て。大塔宮明日十津河を御啓在て小原へ御通ゑ。一定路次ゐて難ゐ逢ちゑべし。志を存ぜん人ハ急ぎ御迎ゐ可参由を觸廻ひつるゐ依て。御使ぞと心得て馳参ゑゑれと御答申ゑれバ。宮ハ是直事ゐふぎと思名年来御廚を放ち給ハざる御守を開こて御覧ずるゐ。金銅を以て鑄立ゑる。北野天満大自在の御神體と。其ハ御眷属老松明神の御神體ゑ。其老松の神像遍身ゑ汗を流し。御足ゐ土の着ゑゑ不思義ゑ。宮感涙肝ゐ銘じのひ扱ハ佳運神慮ゐ叶へゑ。逆徒を平治ち事何の疑ひ可有と。夫ゑ近臣及び野長瀬兄弟を御供こて。上野房聖賢が構へゑる槙野の城へ入らせのひゑれども。多内狭くして事の便あしゑれバ芳野一山の大衆を語らへのひ。愛善寶塔を城廓ゐ構へ。嵓切通す吉埜河を前ゐ當て三千余騎こて楯籠。浸く勢ひを震ひのへゑる



時
義助
直義
貞祐